

第2131回例会

2月7日(木)雨 / 12:30 ~ 13:30 [松魚亭]

1. 講話

(株) トラスティック
代表取締役 島 淳一 氏
「妻の病氣、神戸の震災、
リーマンショック、だから今がある」



2. 出欠

出席 26名 欠席 20名
出席率 61.90% ビジター 3名

3. 来訪者 (敬称略)

東京銀座 RC 中本隆久
金沢 RC 吉田国男
金沢西 RC 坂本藩應

4. お誕生日祝い (敬称略)

10日 中川 茂樹
29日 山上 公介

5. ご結婚記念日祝い (敬称略)

3日 中川 敏允
7日 中川 茂樹
26日 中村 芳明

6. ニコニコボックス

内堀君、向峠君
本日の講師に、島淳一氏をお迎えして、お話しにしています。
中川君 誕生日祝い、有難うございます。また、二回目の結婚記念日です。
合計 7,000円 (累計 591,000円)

1月クラブ日誌

- 9日(水) 金沢8RC 新年合同例会 金沢東急ホテルにて
- 17日(木) 1月定例理事会 松魚亭にて
- 31日(木) 次年度理事会 松魚亭にて

第2132回例会

2月14日(木)晴れ / 12:30 ~ 13:30 [松魚亭]

1. 講話

中国茶インストラクター 小川 敦子 氏
「美味しいお茶を 淹れてみましょう」



2. 出欠

出席 26名 欠席 21名
出席率 61.90%

3. 幹事報告

・例会終了後、2月定例理事会開催

4. ニコニコボックス

内堀君、向峠君
本日の講師、小川敦子様のお話を楽しみにしています。
合計 4,000円 (累計 595,000円)

理事会報告

2月14日(木) / 出席者 11名

◆審議事項

- ①退会委員の件 北崎浩三君 承認
- ②「ロータリー歴史探訪」の冊子購入の件 承認
- ③地区財団補助金事業(シェキラリ)決算報告
- ④2月夜間例会(第3回ロータリー勉強会)の件
会費1万円のうち、4,000円を会員開発委員会で負担する。
- ⑤米山奨学生受け入れの件
ベトナム チェ・タイン・ハイ氏 受け入れ決定
カウンセラーは吉井会員にお願いする

◆協議事項

①金沢百万石 RC 合同お花見夜間例会の件

◆幹事報告

- ①例会場、市内ビジター名札箱撤去の件
- ②退会会員の会費の取り扱いについて

第2133回例会

2月21日(木)晴れ / 12:30 ~ 13:30 [松魚亭]

1. 講話

チーズソムリエ 為広 薫 氏
「チーズのある食卓」



2. 出欠

出席 26名 欠席 20名
出席率 61.9%

3. ニコニコボックス

内堀君、向峠君
本日のゲスト、為広さんのお話、楽しみにしています。
合計 4,000円 (累計 599,000円)

第2134回夜間例会

2月28日(木)晴れ / 18:30 ~ 20:30 [松魚亭]

1. 第3回ロータリー勉強会

2. 例会

乾杯 石川第一分区 Bガバナー補佐 永瀬喜子君
ニコニコボックスの披露
歓談
閉会の挨拶 中村(芳) 会長エレクト

3. 出欠

出席 21名 欠席 25名 出席率 50.0%
オブザーバー 永瀬喜子君

4. ニコニコボックス

永瀬喜子ガバナー補佐
良い日にお邪魔致しました。一緒に勉強させていただきます。
内堀君、向峠君
本日の夜間例及び、第3回ロータリー勉強会に多数ご参加くださり、ありがとうございます。
永瀬ガバナー補佐、ようこそ。
合計 6,000円 (累計 605,000円)



2月クラブ日誌

- 14日(木) 2月定例理事会 松魚亭にて
- 15日(金) ~ 16日(土) 東京小石川 RC 友好訪問
- 28日(木) 夜間例会(第3回ロータリー勉強会) 松魚亭にて

講話予定

- 4月4日(木) 狩女の会 主宰 福岡富士子氏
「私がお伝えしたいこと」
- 4月11日(木) 金沢百万石 RC 合同お花見夜間例会
- 4月18日(木) 会員 喜多利行君
- 4月25日(木) 休会

- 会長/内堀 茂 ● 会長エレクト/中村 芳明 ● 副会長/中村 實博
- 幹事/向峠 仁志 ● 副幹事/大場 修 ● 会場監督/本田 正敏 ● 会計/向峠 仁志
- クラブ会報委員長/山上 公介

- 会員数 / 46名 ● クラブ設立 / 昭和48年10月3日
- 例会日 / 木曜日 12:30 ~ 13:30
- 例会場 / 松魚亭 金沢市東山1-38-30 TEL:076-252-2271 FAX:076-252-2273



ROTARY CLUB OF KANAZAWA-NORTH

金澤北ロータリークラブ



発行 2019.4.4thu

No.954

事務局/金沢市上堤町1番15号 金沢上堤町ビル3階
TEL:076-222-2525 FAX:076-224-2882
E-mail:k-kitarc@angel.ocn.ne.jp
HPアドレス:http://www.kanazawa-north.jp



「金沢城公園」

古九谷とは

会員 越田 和好

突然の話ですが、あなたは石川県の代名詞とも云える「古九谷」はどこで造られたものと考えていますか？

何をいまさら、加賀の山中ではないかと思われる方がほとんどかと思えます。

ところが現在の学説は九州有田の伊万里産というのが主流なのです。国立博物館などでは「有田古九谷様式」と掲示されています。

この説が浮上する前のことですが、「古九谷・古伊万里展」が石川県立美術館と有田の美術館で同一展示物で交互展があり県美で見ました。その時どう見ても同種・同一のものが、片や「古九谷」、片や「古伊万里」として展示してありました。当時でも「加賀説派」、「古伊万里派」の綱引きがあったのは確かです。しかしいまのようにはっきりした主張はなかったのです。

そもそも日本での磁器焼成の始まりは有田・伊万里です。

文禄・慶長の役のおり鍋島氏が朝鮮の陶工や職人を連れ帰ったことに始まります。それに良質な陶土の発見、藩の殖産政策による庇護のもと専業としての生産により大量生産が可能になりました。藩御用の献上品から一般に供する普及品に至るまで造れるようになりました。後には清朝の鎖国政策で景德鎮との交易ができなくなり代替として有田に製品を求めたオランダ東印度会社を通じ、ヨーロッパに大量な輸出をするに至ります。

一方、九谷はというと、窯跡の特定はできていますが、はっきりとした文献資料が残っていないうえに窯存在の物的証

拠となる物原（焼損じ等の陶片の破棄場）が後世の吉田屋窯の築窯や道路工事のためほとんどが消滅しており、出土で見られるのは初期磁器生掛けのいわゆる「元九谷」といわれる陶片のみで、現在古九谷としているものの陶片が見つからないのです。もちろん上絵磁器は生地を焼く窯と上絵を焼き付ける窯と二工程が必要なのですが、これは後述する「生地輸入説」にも関連しますが、この窯が生地の窯であるとしてもいわゆる「古九谷」の生地ではありません。だから生地・上絵が一貫して生産されたという主張は説得力に欠けるわけです。

古九谷加賀産説が不利な検証ばかりで浮上したのが

●まるっきり全部有田での生産説

確かに生地は伊万里の生地と酷似しています。まったく一緒と言っても過言ではありません。また伊万里の物原からは裏の染付の模様が同じで、古九谷の器形の約束事である、内口台、櫛口台、口台内の銘（福とか吉祥にちなむ文字・中国産の影響か）形式のものが出土しています。しかしながら、釉薬の違いについては後述しますが、決定的なことに伊万里様式の上絵釉色とは違う古九谷様式の上絵釉色の施されている陶片出ていません。

先般新聞報道で古九谷様式の色絵の陶片見つかりと伊万里側では喜びの声も報道されていましたが、本当にそこが古九谷の生産窯なら物原にその時代の地層としてもっと多量に存在するはずであり、1個や2個では物証としては疑わしいと考えます。

以上のことで私はこの説をとりません。

●生地の輸入説

この説だとある程度の疑問はクリアーできます。

生地の生産窯がいないこと、良質の生地をつくる陶土が不要なことなど九谷加賀説派に有利な事象が挙げられます。当時の北前船は吃水を下げるのに伊万里産の陶磁器を積み込んだということから生地の輸入は容易であったと思われます。

しかしこの生地輸入説でも上絵窯がなければならぬと言っている疑問は残りますが、これは後世の発掘などの検証を待たねばなりません。

そこでまったくの私見ですのでお含みおき頂きたいのですが、総合的に判断すると私は生地輸入説に賛成です。もちろん上絵窯の存在が前提ですが、これは後世に譲るとして。

なぜかと言うと、上絵の色が九谷、伊万里ともに五彩（赤、緑、青、黄色、紫）を使うのですが発色が違うのです。決定的に違うのは緑です。古九谷はエメラルドグリーン、伊万里は黄色みがかっています。

前にもお話しましたが他の小規模な閑なときに生産するという兼業生産ではなく、藩の庇護のもと専業生産でその工程も分業化されていた伊万里で古九谷様式のものだけが発色の違う絵の具をつかうとは考えられません。

ただこの疑問にもひとつの答えがだせるとしたら前田家からの注文で一つの窯のみで生産されたという考え方も出来なくはありませんが、これも上絵の陶片が出てこないことで考えにくいかもしれません。

古九谷は中国明朝末の南京赤絵の写し（当時相当高価なものだったと想像でき

る）その代替物として藩の什器、贈答品、嫁入り道具とされたものであったらうと考えます。

お姫様の輿入れの時の文献に南京皿とあるのは古九谷であろうと思われています。

また五彩を使った色絵とは別に青手古九谷（赤のないもの）があります。

釉色は同じ色だがほとんどが塗り埋めの絵付けがなされています。これは生地が白くできなかったのでぬり埋めたと思われています。

それならば青手古九谷は江沼産の生地でもつくれたのではないかと考えられます。

江戸後期の復興九谷、宮本、松山、蓮台寺などは青手九谷と区別するため総称青九谷とよんでいます。なぜ復興九谷が五彩ではなく青手古九谷を目指したかということにも興味があります。そこになんらかの製法伝承があって古九谷の再興時に青手古九谷をめざしたのではないかと。

なんの証拠物もないのでまったくの想像ですがそう思われます。

結論、古九谷はどちらで生産されたかは未だ確たるものではありません。

しかし古九谷は古九谷という名前で珍重、愛玩されています。どこで造られたかということで価値が下がると言うものでもありません。

いずれにしても古九谷を含む美術品は文化財として受け継がれて行かねばならないものと考えます。

所有する人も一時の預りものと考え後世に伝えて頂ければと思います。

私どもはその橋渡し役という役回りを自負して行きたいと思えます。